読書のみちしるべ

『寒山拾得 附寒山拾得縁起』



経団連クリエイティブエコノミー委員長
ディー・エヌ・エー会長
岡村信悟（おかむら しんご）

熊被害の報道が出るたび、宮沢賢治の『なめとこ山の熊』を思い浮かべる。「なめとこ山の熊のことならおもしろい」という出だしからして、賢治らしい癖の強い文体だ。最近は、生成ＡＩによる、没個性の文章ばかり読まされるのだが、濁りやゆがみのないつるつるした文章に目をさらし続けていると、こちらの言語能力まで退化してくるようで情けない。賢治の文体は規格外れであるが、「小十郎が眼をまるで変に光らして鉄砲をこっちへ構える」のようなリズムや言い回しが、物語の内容だけではない刺激を脳に与えてくれて心地よい。二葉亭に始まる口語文の創造とその急速な展開は、賢治の文体を生み出すまでに、40年ほどの年月も要していない。ただ、賢治の文章も味わいはあるが、どうしても読み手の調子が合わせられないことがある。李朝白磁を眺める時のように、いつでも心の波立ちが収まり、変わらぬ静かな喜びを与えてくれるのは、やはり鷗外森林太郎の文章であり、日本語における口語文は、彼が最も旺盛な創作意欲を示した大正初期にはその高みを迎えたのだと私は思う。鷗外以降は、新たな語彙の利用や新奇な手法とその組み合わせにすぎず、芥川龍之介や中島敦でさえ作りものめくことがある。

江戸期知識人の伝統である雅俗の古典、漢詩文の素養に加え、『ファウスト』の翻訳を公務の合間に短時日にこなしてしまうほどの（『不苦心談』を見よ）天才的な言語能力が、『舞姫』という擬古文の傑作を青年期にものしながら、中年期には漱石の活躍に技癢（ぎよう）を感じて、初の口語体小説『半日』以降、新たな文体をつくり出し洗練させていく過程を珠玉の短編群を繰り返し読みながら感じ取ることで、日本語を母国語としていることの幸福に気付くことができる。

この鷗外の口語文の完成した姿を、ブラームスの間奏曲を聴くように、多忙の合間に得られるわずかな時間で味わうとすれば、『寒山拾得』に指を屈するだろう。鷗外はこの作品を最後に史伝の世界に移行してしまうという意味でも、彼の口語体小説の到達点である。厚みのある教養から選択された語彙により、極端な修飾を廃しながらも、滋味ある豊かさ、艶やかさを持った抑制的な文体で、東洋禅の世界観といつの時代も変わらぬ私等俗人との関わりが少々皮肉に扱われ、円熟味を増した鷗外の語りの声が聞こえてくるようだ。併せて添えられた作者による『寒山拾得縁起』も、舞台裏を語るだけではない、この小説に入れ子構造のような効果をもたらしている。いずれにせよ、小説は物語られる内容もさることながら、文章そのものを味わうことが読む行為の主眼となるのであり、その意味で鷗外はまさしく東洋の文人の系譜に連なっている。『縁起』は「実はパパアも文殊なのだが、まだ誰も拝みに来ないのだよ」と締めくくられる。

鷗外信徒たる私は「鷗外＝文殊」説を真に受け、岩波版38巻の全集の前に跪拝（きはい）するにやぶさかでない。



著者：森 鷗外
発行：岩波書店